

## 第2部◎

# 慰安婦問題との関わりから

梁 澄子 日本軍「慰安婦」問題解決全国行動

### ——尹貞玉・金学順さんとの出会い

こんばんは。私は足かけ25年、慰安婦問題に関わってきました。リケットさんの日本に来てからの40年に比べると全く波乱万丈でもない、あんまり面白くもない話かもしれないかもしれませんが、そのような自分自身の体験から見えてきたこと、今思っていることをお話することで問題提起にしたいと思います。



慰安婦問題に私に関わるようになったきっかけは、1990年の12月。韓国挺身隊問題対策協議会の初代の共同代表だった尹貞玉ユンジョンオクさんのお話を東京で聞いたことでした。

彼女の話聞いた在日朝鮮人女性たちで、何かやろうという動きがこの年から始まったのですが、何しろ私のように口数の多い在日朝鮮人の女が20人も集まりますとなんにも決まらないんですね。会の名前一つ決めるのにも何か月も会合を繰り返して、全然会の立ち上げができないので、とりあえず会の目的を先に決めました。それは、慰安婦問題の世論化というものでした。

当時、慰安婦問題は全く日本で話題になっていなかったのも、この問題を社会に知らせることを目的にして、とりあえず世論化ができたならその時点で解散しよう、というようなことを話しているうちに91年の8月に、韓国で金学順キムハクスンさんという被害者の方が最初に名乗り出たのです。

この方がこの年の12月には日本で提訴するという事になって、あっという間に世論化されてしまいました。私たちが会をつくる前に、日本ではこの問題が大きくクローズアップされて、とりあえず世論化されたけれども、そのあとで私たちは、「従軍慰安婦問題ウリヨソン・ネットワーク」というグループを11月にやっと立ち上げることになりました。

ところが、当時の世論化の内容というのが、私たちにとっては大変不満なものでした。私たちは金学順さんをはじめ、まだ被害者が1人も名乗り出ていないよ

### プロフィール——梁 澄子（ヤン・チンジャ）

北海道厚岸市生まれ。一橋大学ほか兼任教員（朝鮮語）、通訳・翻訳家。1993年提訴の在日朝鮮人の日本軍「慰安婦」被害者・宋神道（ソン・シンド）さんの支援運動にかかわる。宋さんのドキュメンタリー『オレの心は負けてない』（2007年）にプロデューサー、撮影として参加。『日本軍「慰安婦」問題解決共同行動』共同代表。『戦争と女性の人権博物館』代表。著作に『海を渡った朝鮮人海女——房総のチャムスを訪ねて』（新宿書房、1988年）他多数。

うな状況の中でこの問題について話し合っていたので、これは女性の人権問題であり、また歴史認識の問題でもあると、かなり頭でっかちな議論をしていたんですね。私自身に関して言えば、とりわけ歴史認識の問題というのが、当時とても大きな課題としてありました。

日本で生きていく上で、なぜ私が日本に生まれ育たなければならなかったのかということについて、周囲の人たちにわかってもらいたいという思いが非常に強くあったので、この慰安婦問題も、また私自身が抱えている在日朝鮮人問題も、日本が朝鮮を植民地支配した時代に発生した問題なので、慰安婦問題を通して在日朝鮮人の歴史についても社会に訴えていきたい。そんな思いが、当初は強く私の中にありました。

ところが、慰安婦被害者、金学順さんご自身の裁判が日本で始まったことによって、日本の世論の中には「いくらお金を払えばいいのか」といった金銭補償の問題としてこの問題をとらえるような傾向も出てきたのです。

そこで私たちは本を出して、朝鮮人女性として私たちがこの問題の中に何を見出しているのか。歴史認識の問題として、また女性の人権問題として、私たちが考えていることを世に問うていこうということになったのです。それで私が韓国に行って、被害者2人に直接会って話を聞くことになりました。

ここでちょっと余談なんですが、私にとってはこれが初めての韓国でした。それまで、私の外国人登録証の国籍欄の記載は「朝鮮」だったので、私は韓国には行ったことがありませんでした。そして、この記載を朝鮮から韓国に変えたのが91年の10月です。それから韓国のパスポート申請をして、92年の3月末にできたてほやほやのパスポートを持って渡韓したわけです。

### ——尹順萬さんとの出会い

そうして書いた『朝鮮人女性がみた「慰安婦問題」』<sup>1)</sup>という本があるんですが、その中の1節に書いた尹順萬ユンスンマンハルモニとの出会いによって、それまでの私の慰安婦問題への考え方とか、接し方が根底から揺さぶられることになりました。

当時は、1992年ですから88年のソウルオリンピックのあとです。このオリンピックのときにソウルでは、それまでタルトンネと呼ばれていた貧民街が取り壊されて、ほとんど姿を消していたんですが、私が訪ねて行った尹順萬さんのおうちはソウルでもう数少なくなったタルトンネの中にありました。

初めて訪れた韓国で、いきなりタルトンネの貧民街を見た衝撃は今も忘れられません。そこで会った尹順萬ハルモニのお話というのは、衝撃をはるかに超える衝撃として私の中に残っています。

尹順萬ハルモニは右腕が曲がったまま動かないんですね。そのことに途中から

1) 尹貞玉編『朝鮮人女性がみた「慰安婦問題」』三一書房、1992年。

気がついてどうしたのかと聞くと、慰安所で抵抗したときに軍人に腕をねじられて骨折したまま、治療ができずにこういうふうに固まってしまったということでした。

それで韓国に戻ったあと、障害者は障害者同士で結婚しなさいと言われて、やはり障害を持っている男性と引き合わされて結婚して、娘が1人いるんですが、娘が自分を養うために35歳になっていまだ結婚もできずに工場で働いていると言って、左手で顔を覆って泣き続けるハルモニを目の前にして、私はそれまで自分が頭でっかちに考えていたこと、つまり、この問題を通して日本の歴史認識を問うんだとか、自分自身が在日朝鮮人の女として生き難いと感じているさまざまな問題を解決していくんだとか、そういうことを考えていたことが本当に恥ずかしくて消え入りたいような思いで日本に帰ってきました。

そういう思いを書いた部分を一部だけ読みますと、

日本軍の不満のはけぐち、戦争遂行の道具として全人生をめちゃくちゃにされた人たちが、今も人生の軌道を正せないまま生き続けているという冷厳な事実は、私の拙い想像力をはるかに超えたところにあったのだ。

これが当時の率直な思いでした。そして、「当事者たちの心と生を救うことが何物にも優先されるべき緊急課題であることに私はやっと気づいた」というふうに書いています。

#### ——宋神道さんとの出会い

その後、在日朝鮮人の慰安婦被害者<sup>ソンシンド</sup>宋神道さんと出会って、彼女の裁判を支援する過程でそのような思いは、ますます強いものになりました。

詳しいことは、本日『オレの心は負けてない』という本とDVD<sup>2)</sup>を販売していますので、よろしかったらぜひ見ていただきたいと思います。その本の中から一部抜粋して読みたいと思います。

裁判に関わった当初、同じ在日朝鮮人女性として私自身がこの国で感じてきた生き難さと共通したものが何かあるのではないかと考えていた。しかし、国家による重大人権侵害の被害者が抱える闇は、通常の体験しかしたことのない者には到底知り得ないものであるということを知った。私たちの運動は、「知り得ない」ということを「知る」ことから始まった。到底「知り得ない」その闇の暗さを認識しつつ、知ろうという努力を怠らないこと、宋さんの意

2) 在日の慰安婦裁判を支える会編『オレの心は負けてない——在日朝鮮人「慰安婦」宋神道のたたかい』樹花舎、2007年。DVD『オレの心は負けてない——在日朝鮮人「慰安婦」宋神道のたたかい』安海龍監督、95分、2007年。

志を尊重し、宋さんを運動に利用することを自らにも、他者にも、決して許さないことを固く心に決めて臨んでいた。

このように、被害者と出会うことで慰安婦問題に対する私の姿勢は大きく変化していったわけですが、実は、被害者のほうも非常に大きな変化を遂げるようになりました。

宋神道さんのように名乗り出て社会的な活動をおこなった被害者は、自らの体験を語り、それが人々に受け入れられることを確認する作業を何度も繰り返しながら、さらにそれを社会化することで自ら被害回復の道を歩んできました。

これは運動が勝ち取った大きな果実であるのはたしかですが、一方で歴史の事実をゆがめる言説が彼女たちを苦しめているという現実があります。そこで、歴史認識を正すことの大切さを改めて今感じています。

つまり、ある意味で原点に立ち返る思い、私はこの間被害者に寄り添い、被害者の人権回復を勝ち取ることがこの運動の目的だというふうに考えてきたんですが、そもそも私自身が考えていた、歴史認識を共有できないことに対する不満。これを解決しないことには、被害者たちの人権回復をできないのだということに改めて気づき、原点に立ち返っているというのが現状です。

### ——改めて「歴史認識」を問う

ヘイトスピーチをまき散らす差別排外主義運動は、もちろん大きな問題だと思いますが、日常的に接する学生など、若者層や一般の市民のあいだにも、ヘイトスピーチに対しては嫌悪しながらも、それに連なるような言説については受け入れてしまうような脆弱さを感じます。それは、ひとえにきちんとした歴史教育がなされていないためだというふうに思うんです。在日朝鮮人問題にしても、歴史を知っていれば絶対に特権などという言葉が出てくるはずはありません。

先ほど道場さんが、日本型排外主義の起源は冷戦体制下で日本が過去の清算をうやむやにするという括弧つきの「恩恵」を被ったことにある。中国と朝鮮半島が分断されている状況は、責任の所在をあいまいにすることに役立ったという樋口直人さんの言葉を紹介していただきましたが、まさにそのような状況の中でアジアの被害国との歴史認識の共有という、加害国として当然なすべきことをしてこなかったつけが今、重くのしかかっていると思わずにはいられません。

このような歴史認識の不在というものが背景にあって、慰安婦問題を解決しようとする運動を反日のための運動だという見方が、ここ数年また非常に広まっていると思います。

しかし、私たちの運動は決して反日運動ではありません。女性の人権が戦争という国家目的遂行のために踏みじられたということ。人間が人間として扱われずに戦争の道具として扱われたということ。国家権力による性の収奪と暴力。こ

ういったことに対して抗議して、2度とこのような事が起きてはならないということを書いてきた運動です。

一つの例として、韓国の被害者<sup>キムボクトン</sup>金福童さんと吉元玉<sup>キルウォノク</sup>さんが提唱して立ち上げられたナビ基金というものについて、簡単にご紹介します。

これは、この被害者のお2人がもし日本政府から賠償金が出たら、自分たちと同じようにいまだに戦時下で性暴力の被害に遭っている人たちに全部あげたいと発言したことから立ち上げられた基金です。そして、コンゴの性暴力被害者への支援に始まり、現在はベトナム戦争時に韓国兵の被害に遭ったベトナム人女性と、子どもたちへの支援を続けています。

また、このナビ基金を運営している韓国の挺対協（韓国挺身隊問題対策協議会）は、米軍基地周辺で売春をさせられてきた女性たちが、韓国政府を相手にして訴えた裁判を支援しています。個人の人権を踏みにじる国家という権力に対する異議申し立てには、他国か自国かという区別はありません。国家権力に踏みにじられる可能性を持っている市民として、国境を越えて自らの権利を守るとともに、他者の人権も守る。つまり、自らの人権と他者の人権が否応なくつながっているということを認識した人々の動きなんです。これは、本日のテーマである市民的不服従、まさにそのものだとは私は考えています。

先ほど道場さんは、2度の世界戦争の経験から導き出された人道に対する罪の概念は、不正な殺戮や支配に対して一人一人の人間が拒否する義務と権利を持つことを明らかにしたということもお話ししてくださいました。慰安婦問題は、まさに一人一人の人間が拒否する義務と権利を持っているんだということを訴える運動だったと私は思っています。

ところが、私たちと同じように権力から踏みにじられる側の個人にすぎないという歴然とした事実から目をそむけて、国家の側に身を置くというナイーブさにとらわれた人々には、国家権力が起こした戦争の被害者たちが、あなた方にはこんな目に遭ってほしくないんだと、全身全霊で訴える声がどうしても伝わっていかないようです。このことが本当に残念でならないと思っています。以上で最初の発題を終えます。